
また会えたなら

白兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

また会えたら

【Zマーク】

Z8200E

【作者名】

白鬼

【あらすじ】

気持ちを伝える＝言葉にする。それってとても難しい。

「 来て正解だつたかな？」

その一言から恋は始まっていたのかもしれない・・・。

9月上旬。

文化祭のシーズンがやつてきた。3年生の相羽葉子にとつては最後の文化祭。

受験を一般入試でしようと考えている葉子は、文化祭の係りは出来るだけ辞退しようとしていた。

「葉子～！お願い！一緒に係の仕事やつて！！お願いお願い！1人でなんて嫌だ～。絶対に知らない人ばかりだよ～！！」

友人の飯田美紀が懇願してきた。

美紀とは2年生の時に知り合い、今では親友である。

葉子は1年生の頃から勉学に熱心で、学年1位を常に保ち続けていた。

そのためか、友人をつくる事を忘れていた。

それに気づくのに1年かかるとは、鈍感というか何というか。そもそもと人見知りであつた事も関係しているのかもしれない。まずいと思つた葉子は、なんとか話しかけ、やつと美紀という友人ができた。

それからというもの、充実した毎日を送つていて。

「えつと・・・今年は・・・ちょっと」

推薦で決まる人が多い中、葉子は一般入試で行こうと思っていた。もちろん美紀もその1人。

でも、なかなか係りが決まらないため先生がじょんけんで負けた人

と宣言した。

そして最後に残つた美紀が係りに指名されたのだ。
実は美紀がこう言つのも3回目。

それを断り続けた葉子も葉子だが、言い続けた美紀もなかなかのものである。

「お願ひ！！他クラスは2人なんだつて！なのにA組だけ1人つてないよー！」

美紀の言い分も分からぬわけではなかつた。ただ正直、面倒だつたのだ。

美紀がなろうとしている係りは毎日遅くまで残り、巨大な看板を創作しなければならないのだ。

葉子が逃れだがるのも無理はない。誰だつて嫌なのだ。

「うん・・・分かつたよ」

「本当！？ありがとう！じゃあ一緒に頑張ろうね！」

「・・・うん」

葉子はとうとう折れた。親友の頼みをこれ以上断るわけにもいかなかつたのだ。

美紀には色々と助けられている。それに勉強は自分だけの問題ではない。美紀だつて同じ。

高校最後の思い出づくり。そう考へることにした。

数日後。

「葉子、放課後集まりだつて」

「うん、分かつた・・・」

美紀が去つた後、葉子はため息をついた。

割り切つたつもりだつたが、これから1か月間、勉強が思うように出来ない事が不安だつたのだ。

放課後になり、教室移動した。

下級生はもう大体集まっていた。

葉子と美紀は適当な位置に座つた。

「今日はすぐに終わるかもね」

「うん。 そうだといいな」

そんな会話をし続けていると、先生が入ってきた。

「全員いるな」。それでは始める。まず、男女で分かれて作業するんだが

」

説明は短かった。男子は木材の切断・組み立てなどの力仕事。女子はイラストが担当らしい。

美紀はノゴギリを使いたかつたらしく、頑垂れている。

「じゃあ男女各リーダーが決まつたら解散していいぞ」

そう言うと、先生は教室を出でしまった。右端の方で、他クラスの男子が叫んだ。

「 で、誰がなんの？」

「ここは1人しかいないでしょ！」

「やつぱ？ そうだよな」。3年間もこの係りをしてるもんな

3年男子の視線が1人の少年に集まつた。

「・・・え、俺？」

「他に誰がいるんだよ

「ちょ・・・待つて」

「待たない。はい、男子筆頭決定！！」

周りから拍手が起こつた。無論男子だけだが。指名された当人は俯いている。

葉子は女子は誰がなるのだろうと思つていた。

皆からやりたくないオーラが出でているのが見なくても分かる。勿論、隣の美紀からも感じとれる。

「しようがない！ あたしがやる！」

突然1人が手を挙げ、宣言した。

「いつまでも決まりそうにないし、早く帰りたい。って事で、みんな宜しく」

名前も知らぬその人は、帰ってしまった。葉子は啞然としていた。

ああいう人もいるのだと。

少し尊敬までしてしまった。

「決まつて良かつたね」

と、美紀が小声で呟くと葉子は頷いた。

翌日から作業が始まった。

描くデザインを持ち寄り、話し合った結果、葉子のデザインに決まりた。

自信がなかつた葉子が、選ばれて嬉しかつた。

「それじゃ解散。男子の方が終わらないと、あたし達は動けないから」

D組の小西[彩夏はてきぱきとリーダーの役目をこなした。彼女がリーダーになつて正解だつたと葉子は思つた。

「ねー葉子。たまには寄り道して帰らない?」

今日、美紀は予備校が無いらしい。予備校へ通つていらない葉子は家に帰る以外、特別にする事がない。

それに久しぶりの寄り道。断らないはずがない。

「いいね!ついでに夕食もどう?」

「やつた!デートだ」

葉子と美紀は駅へと向かつた

次の日は生憎の雨。

葉子は体育の時の忘れ物を取りに、体育館へ向かつていた。

放課後は部活で利用されてしまうため、足を速める。

すると、体育館へ繋がるホールで男子が作業をしていた。湿氣が強いせいか、汗をかきながら働いている。

「もしかして体育館に行くの?」

1人に声をかけられた。その人物はリーダーになつた者だった。

「え・・・う、うん」

普段、全く男子と話さない葉子は動搖してしまつた。

「そつか。待つて。今、少しどけるから」

すると、重そうな木材を軽々と持ち上げ、道を作つた。よくみると、周囲は木材で埋め尽くされており、足の踏み場がなかつたようだ。

「はい、どうぞ」

「あ、ありが・・・とう」

ぎこちなく礼を言い、走つてその場を後にした。

「緊張した・・・」

手で胸を抑え、自分を落ち着かせた。

（優しい人もいるんだ・・・）

校則は厳しいが、最近は身なりが崩れています人が多いため、葉子には新鮮に感じた。

翌日。

「ジメジメする～。暑～い」

放課後、体操服に着替えた美紀が腕に水をかけていた。

葉子は眉間にしわを寄せながら、ブラウスを引っ張る。昨日の雨のせいで湿気が残っているのか、肌にくつつくのだ。

足早にビニールシートが牽いてある日陰へ向かつた。

「やつほ～。今日は下書きだけで終わるかも」

（あ、小西さんだ）

美紀と同じく体操服を着ている。

「あれ？相羽さん、体操服は？」

「えつと・・・忘れちゃつて。でもペンキは使わないんだよね？」

「うん。使わない」

「今年でこの制服も終わりだから、汚れてもいいかなつて・・・」

「相羽さんがいいなら問題ないよ

「ありがと」

早速作業にとりかかった。少し動いただけで汗が滲み出でくる。

「あ、ーー！湿気ーどこか行け！」

小西さんが髪を束ね始めた。

「 つるさいんですけど」

声の方を向くと、男子のリーダーがいた。

「ホントの事でしょー」

「みんな同じ事思つてるんです。我慢して下さー」

小西さんは頬を膨らませた。

「若わーん！終わつた！」

「おー。今行く」

『若』は呼ばれ、行つてしまつた。

「ねえ、ちょっと

「・・・え？ビーブしたの美紀？」

「来て来て！」

葉子は訳も分からずニヤニヤしている美紀の後に続いた。

「絶対好きだよね

「何を？」

「小西さんだよ。絶対に若月君の事、好きだよ」

そこで葉子はリーダーの名前が若月である事を知つた。

「美紀つて凄いね。そんな事が分かるなんて」

美紀は呆れた顔をした。

「見れば分かるよー声が違うもん」

葉子は彼女の声を思い出してみた。だが、変化が分からなかつた。

「リーダーを引き受けたのもそのためか・・・」

美紀は顎に手を当ててている。

「・・・美紀？」

「戾ひづ。確かめなくちゃ」

葉子の手を引き、走つた。

「見てよ。2人で話してる」

「きっとこれから進め方を話し合っているんだよ」

「あーあ・・・あんたってさあ・・・」

確かに美紀が言うとおり、小林さんは楽しそうに話している。

前に同じクラスだったと聞いていたため、疑問に思わなかった。

「じゃあ今日は片付けよう。明日、男子は女子のサポートに入つて

「「「はーい」」

それぞれ、各教室へ戻った。

「お腹空いた・・・。食べて帰ろ♪」

「うん。そういえば、マックに新しい商品入ったよね

「そうだつた！早く行こ！」

急に元気になつた美紀に連れまいと、葉子は走つた。

「あ～、幸せ。いつもの倍、美味しく感じる」

葉子と美紀はマックで夕食をとつていた。かなりの空腹だったのか、2人共ポテトを2つずつ頼んだ。

「生き返る・・・

「食べるつて幸せだね・・・」

「お前ら何言つてんの？」

頭上から声がした。見るとクラスメイトが立つていた。髪を立たせている。校内以外は校則無視の構えらしい。

そして隣にいたのは若月だった。

「げ！佐々木・・・食欲失せた」

「失礼だな。・・・つてなんでポテトが4つもあるんだよー・食い過ぎだろ！」

「お腹空いてるの〜。あっち行つて。ね、葉子？」

葉子は苦笑いをした。

「若さん見ろよ。これ全部食つたら太るよな

「2人とも瘦せてるから大丈夫だよ」

「・・・若さんって、さらつとそういう事言つよね」

「そう？・・・あ、あそこ空いた。ほら、座ろう」

若月と佐々木は外が見えるカウンターの方へ向かった。

「なんで佐々木がいるんだ・・・」

「よく来るのかな？」

「たまにだと思つ。あの2人、チャリ通だし」

「そりなんだ・・・。でも学校まで大変そう」

「家まで25分くらいかかるみたい。でも運動系の部活に入つてから平気じゃない？」

「そうだね」

葉子と美紀は食べ終わり、プレートを片付けた。

葉子は若月達に挨拶をしようとしたが、話しているよつなので諦めた。

「あ～、春来ないかな・・・」

電車の中、美紀が広告を眺めながら言つた。

「春は暖かいもんね」

「そつちの春じゃない。恋です～」

「あ、ごめん」

「誰でも良いつて訳じゃないけど・・・なんか安心出来る場所が欲しい」

「家ではなく？」

「それ以外で」

「そうだ！手、見せて」

「手？」

「左手出して」

美紀は言われるまま、左手を出した。手を取ると葉子は側面を見た。

「何か分かるの？」

「うん。今、結婚線を見てるの」

「そんな線あるの！？」

「こ」の線だけは生まれてから一生変わることがないんだよ」「へえー。葉子、凄い！」

「本を少し読んだだけだから、あまり当てにならないかも」「いや、葉子だから大丈夫だよ。うん。信憑性がある」「あははー！ありがとう。・・・美紀は今かな？」

葉子は、じつと手を見ながら言った。

「今と・・・25歳・・・かな？」

「え！出会いが？」

葉子は頷いた。

「今も良いけれど、25歳の方がもっとといいかも」「・・・」

「美紀？」

「・・・分かった。今もいいんだよね？」

「う、うん」

美紀は何か考えているようだった。

葉子は誰か気になる人でもいるのだろうと、敢えて聞かなかつた。

「葉子、ありがとう」

「どういたしまして」

電車が止まつた。駅に到着したらしい。

葉子は美紀に別れを言い、ホームへ降りた。

「私は・・・まだ」

掌を見ながら葉子は呟いた。

数日経ち、文化祭の看板は半分まで終わつた。このままの調子でいけば、間に合う様だ。

若月曰く、去年は手の込んだ看板で、ギリギリまで残つたそつだ。今日、美紀は放課後残れないので、葉子一人で作業場に向かつた。早く来すぎたのか、誰もいなかつた。

(道具とか出しておいた方がいいよね)

少し離れた場所に板やビニールシートなどが置いてある。葉子は先に道具を持って行き、次にシートを敷いた。風が少し強かったので、飛ばされないよう工夫する。

最後に板を運ぶ事にした。

薄いが量があるため、少しずつ持つていった。風があるため、バランスをとりずらく大変だった。

(やつと残り4枚・・・)

持ち上げたが、疲労も溜まっていたため、すぐに降ろしてしまった。

(握力が・・・)

葉子は少し休み、また持ち上げてみた。

(あ、今度は大丈夫かも)

歩いている、若月がいた。

「あ・・・持つよ」

葉子は嬉しかったが、若月の手には提出物であるうつノートが何冊もあつた。

「大丈夫・・・だから。それ、提出・・・しなくちゃ・・・いけないんでしょ？」

若月は思い出した様な顔をした。

「う」「ごめん」

若月は走つて行つてしまつた。

葉子は風が吹かない内に運ぼうと急いだ。だが、願いも虚しく強い風が吹いた。

(どうしよう！力が・・・)

葉子が倒れてしまふのを覚悟した時、誰かに支えられた。

「・・・来て正解だつたかな？」

見上げると、そこには若月がいた。

「え！・・・どうして？職員室に・・・行つたんじゃ・・・」

「ああ、丁度いい人が歩いてたから渡した」

「・・・あ、ありがとう」

「う、うん」

その後、板は全て若月が運んだ。

葉子は若月がいなかつたら、完全に怪我をしていました。

「若さーん！」

（あ、小林さんだ……）

「今日も手伝い宜しく～」

「はいはい」

この時、葉子は胸が苦しくなった。
これが恋だと自覚しなかつたが。

「ちょっと抜けるね」

そう言い、小林さんは何処かへ行つてしまつた。

葉子は黙々と紺色を作つた。塗る面積が多いのに作るのが困難な色
だつた。

最初は調節が難しかつたが、次第に分量が分かつてきた。

「隣いい？」

振り向くと若月だつた。どこか疲れた顔をしていた。

「つ・・・疲れてるの？」

「え?・・・まあ色々と」

若月は筆を取り、塗り始めた。

「さつき・・・ごめんなさい」

「さつき?・・・板の事?」

葉子は頷いた。

「むしろそつちの方が疲れたんじゃない?シートだけにすれば良か
つたのに」

「み、みんなすぐに取り掛かると・・・思つて・・・」

若月は笑つた。

「真面目だね。あの人们にも言つてあげなよ」

「だれ?」

「あれあれ」

指で指した方を向くと小西さんがいた。

先生と話している。どこか楽しそうだ。

「全く・・・相羽さんが頑張ってるのにね」

葉子は首を振った。

「小西さんはリーダーになつて・・・くれたし・・・

「・・・そつか。まあ相羽さんのお許しが出たから良しとしますか。

あ！ペンキ付いた！」

葉子と若月は見合い、笑つた。

「そういえば、この色はどうやって作ったの？」

「それは――」

葉子は楽しかつた。普段男子と全く話さないが、若月は違つた。
何か違うのだ。雰囲気なのか、それとも言動なのか。

葉子は若月と話しながら、考えていた。

次の日、葉子はいつもとは違つゝ気持ちで作業場に向かつた。

(若月君・・・もう来てるかな?)

行ってみるとまだ誰もいなかつたので、葉子は看板が置いてある場所へ移動した。

完成に近づいているため、色が鮮やかだつた。

葉子はふと、若月が声をかけてくれた時の事を思い出した。期待を
しているわけではないが、また2人で話したいと思った。

(何考えてるんだろう・・・)

葉子は立て掛けた看板を3枚ずつ運んだ。その後、シートを敷いて道具も出した。

その間、若月は現れなかつた。

看板があつた倉庫の前に、長椅子が設置されている。葉子はそこで
休む事にした。

足を伸ばし、背もたれに寄りかかり、目をつむつた。そのまま寝て
しまいたい気分だった。

「お休み中？」

不意に声がしたので、田を開けるとそこには若月がいた。

「あ・・・今すぐ行くから」

葉子は立ち上がりうとしたが、若月に両肩を押され、元の位置に戻された。

「・・・え？」

「俺も休む」

言い終わると葉子の隣に座つた。

「早く来たかつたけど、余計なのに捕まつてさ」

「余計な・・・の？」

「そう。相羽さんも知つてゐる人」

「誰？」

「言わない。その人に言つと困るから」

若月はニッと笑つた。

葉子は頬が熱くなるのを感じた。

よく考えてみれば、若月が隣に座つた時からそうだったかもしだい。

しばらく沈黙が流れた。

葉子は何か話そうと思つたが、話題が見つからなかつた。

「あのや」

若月が切り出した。

「俺、何も話さないの耐えられないんだけど」「え・・・えつと、どうすれば・・・いい？」

「ううん。じゃあ俺の質問に答えて」

「う、うん。わかつた」

「普段、どんな曲を聞くの？」

「・・・ボサノバかな？」

「ボサノバか。あまり聞いたことないな」

「たまに喫茶店とかで流れてるよ」

「俺、喫茶店行かない」

若月は笑いながら言った。

「それじゃ……好きな色は？」

「縁と……白」

「あー俺も好き。銀とか黒もいいな」

「男の子って、そういう色……好きだよね」

「そう言われればそうかも」

若月はとても優しい目をしていた。葉子は思わず見惚れてしまった。

そんな自分が恥ずかしくなったのか、逃げ出したくなつた。

「……そういえば、もうそろそろ行った方がいいよね」

葉子は立ち上がつた。

すると、若月は少し眉間に皺を寄せた。

「相羽さんは全部運んだんでしょう？ちょっと遅れたつて何も言われないって」

「でも……やっぱり『何してんの？』『』」

振り返ると腕を組んだ小西がいた。

「『』ごめんね。今、行くから」

葉子は走り出した。

「あ……」

若月も立ち上がり、追いかけよつとした。

しかし、腕を捕まれた。

「いかないで……」

(小林さんは若月君の事が好きだったんだ！それなのに私は……)

葉子は走りながら思つた。

作業場に着くと、美紀がいた。

「あ、葉子。どこ行つてたの？」

「えつと……」

葉子が答えを導き出せずにいると、美紀が肩を優しく叩いた。

「正直に答えなくていいよ。これ全部運んだの葉子なんでしょう？」

「さうだけど……」

「『めんね。私も一緒に行ければ良かったのに』

「そんな事ないよ！それより、どこ塗ればいいかな？」

「じゃあ・・・』の鉛筆で書いた通りにお願いします」

「うん！」

葉子は若円と小西が来ない事が気になつたが、今は集中しようと考えた。

あれから数日経ち、文化祭前日になつた。

登校してすぐに準備に取り掛かつた。

「今日は午前中で終わりだね」

「うん。それに明日から文化祭だし、最高！」

美紀と葉子はワクワクしていた。

今まで頑張つて作つた看板も完成し、設置するだけとなつた。

若円が脚立を運んできた。

「若さん、これ長くない？」

男子の1人が尋ねた。

「これくらいないと届かないみたい

「誰が乗るの？」

皆が若円を見た。

「『』は若さんでしょ」

「うん、若さん高い所似合ひよ」

「若さんカッコイイー」

「最後、棒読みだつたぞ！」

しうつがないなと言いながら、若円は皆の希望通り脚立に登つた。

「この位置でいい？」

「OK！いいよ」

葉子達は看板を見上げた。

チエス盤の様なデザイン。シンプルだが、存在感があつた。

「よし、解散。みんな帰つて明日のために休んでおけ

「「「はーい」」

皆が散つていく中で、葉子だけはまだ看板を見つめていた。
(もし)この係りになつていなかつたら……)

「葉子」！何してんの？」

美紀はもう先に行つてしまつていた。

「「「めん、すぐ行く！」」

葉子は看板を背に走り出した。

文化祭は無事に終わつた。

準備にあれだけかかつた看板も取り外された。

(これからは受験モードか・・・。頑張らなきや)

葉子は釘を外しながら、これからの事を考えた。2月までが勝負。
その後は卒業するだけ。

高校生活は早く感じた。入学したばかりは不安で一杯で、次の日が
来る事が怖かつた。

だが、美紀と出会い、葉子は変わつた。少し社交的になつたのだ。
これは葉子にとつて大きな進歩であつた。

放課後。

自習室へ向かつた。

学校側が生徒のために設置してくれたのだ。ノートに記帳すればい
つでも利用できる。

葉子の様に予備校へ行かない者にとつて、有り難かつた。

葉子は自習室に鞄を置き、名前を記帳しに進路室へ向かつた。

「失礼します。・・・あ」

中に入ると、若月が友人と話していた。

(ど、どうじょう)

文化祭の係りで知り合っただけ。しかも、そんなに話していない。

今、会つたところで何も起きないだろう。

葉子はもう話せないと思つと辛かつた。だが、どうして辛いのかよく分からなかつた。

カードを提出するのも忘れ、次の行動を考えていると、会話が終わつたのか、友人が進路室から出でていつた。

そして、若月と目があつた。

「葉子……冬休みどうする?」

「どうせこいつも……巣籠もりだよ」

「ですよねー」

溜め息をつくと、美紀は席へ戻り、帰り支度を始めた。今日で2学期は終わり。

人生で2度目の辛い冬休みが来る。

(あと数ヶ月で終わるんだから、頑張らなきやー!)

葉子も支度をし、美紀に別れを告げ、自習室へ向かう。

窓の外は雪が降りそうな程に寒そうだった。膝を出して歩いている場合ではないくらいだ。

自習室の前まで来ると、鍵がかかっていることに気づいた。

H.R.が終わって間もないのに、まだ先生が開けに来ていないのだろう。

葉子は仕方なく職員室へ足を向けた。

(そりいえば終業式の日には残る人なんているのかな? もしかして今日は貸し切り……だつたりして)

少し胸をワクワクさせながら階段を降りようとすると、登ってくる佐々木と田があつた。

葉子は思わず田を反らしてしまった。何年も続いている嫌な癖。

(何度田だと思ってるのーいい加減に直さなきやー)

佐々木がどんな顔でいるのか恐る恐る見てみると、案の定、唇を尖らせていた。

「飯島からシャイだつて聞いてるけど……やっぱソレは良くないと思つ」

その通りです、と言つしかなかつた。佐々木は何も間違つたことを言つていない。

自分だつて田をそらされたら傷つくな決まつてこる。

「「」、「めん。本当に・・・いたつ！」

(ななな、何！？)

葉子は手刀を受けた。いや、くらつた。半分本気かと思つくらい痛かつた。

「さつき俺が受けたダメージ分」

そう言うと彼は階段を一段抜かしで上がつていった。葉子はしばらく唖然としたまま階段にいた。

隣を何人の生徒が通つたかわからない程に。

「失礼します」

葉子は職員室へ入り、鍵の保管場所を見た。すると、あるはずの鍵がない。予想ははずれていったようだ。

退出しようとした時、担任教師に呼びとめられた。

「待て、相羽」

視線を送ると、笑みを浮かべている羽佐間がいた。

「ちょっといいか？」

「はい」

2人揃つて廊下へ出た。

「佐々木？どうしたの？」

山本が先ほどから無表情の友人に声をかける。

「・・・別に」

「そう？・・・で、何があったの」

「・・・お前なあ」

佐々木が言葉を続けようとした時、勢い良くドアが開いた。ここが自習室だという配慮が全く感じられない。

「あれ？ いない？ ま、いつか」

その様なことを言つたかと思うと、また威勢よく閉まった。

「うわー、何あれ。日頃の生活レベルがわかりますなあ」

山本は机の仕切りで人物は見えなかつたが、声で特定することがで

きた。

「な、佐々木くん」

「・・・」

「な！」

「・・・」

「聞いてんの・・・か！」

山本は思いつきり佐々木の椅子を蹴った。大きな音が響く。

「な・・・にすんだよ！ビビッただだらうが！」

反射神経の良さで無様に倒れることはなかつた佐々木だが、手で胸を押さえていたところをみると、相当驚いたようだ。

「あ、教科書忘れた。行つてくる」

しつれつと言い残して、山本は廊下へ出でていった。

「・・・はあ。マジわかんねえ」

自分以外いなくなつた教室。数秒前まで座つていた椅子が、手の届かないところまで転がつていた。

(めんどくせ・・・。あいつが戻つてきたやうにせんか)

佐々木はしばらく床に座つてゐることにした。

さすがに終業式だけあって、誰も来る気配がない。受験勉強する生徒は予備校の方へ行つてゐるのだろう。

窓越しに景色を眺めると、もう雪が降つていた。

山本が出て約2分弱、扉が開く音がした。

(あいつ、歩くの早いからなー)

佐々木は上半身だけだそつたが、隠れることにした。

この教室の机は予備校の自習室をながらの大きさなので、標準体型の佐々木は容易に潜り込めた。

足音が近づく。もう少しで視界に入る。だが、

(・・・あ！？相羽ちゃん！)

山本ではなかつた。

(こんなの見られたらやばい！…)

急いで出ようとすると、頭を打つた。何の音かと相羽が振り向く。

「えー？ や、佐々木くん！ なにを……」

「お・・・ わう」

制服のホコリを払いながら、口口口口と立つ。消しゴム落したんだ
と苦しい言い訳。

葉子は深読みをしなかつたため、なんとか収まつた。

「・・・ あ、あのー」

「ん？」

完全に田が泳いでいる葉子。佐々木は先ほど起きた階段での出来事を
思い出した。

きっとそのことを気にしているのだろう。

しかし、佐々木はもうどうでもよくなつていたので話をそらすことに
にした。

「さつまの」「なにそれ？」

葉子が佐々木が指さすモノを見た。勉強道具と共に持つていたお菓子の袋である。

「い、これは羽佐間先生から貰つたの」

「へえー・・・ ワイロ？ 口止め料か？ 先生の秘密知つちゃつた感じ
？」

「違つよ！ それにあの先生に秘密なんてなさそうだよ……」

「・・・ はは！ 何言つてんの相羽さん！ ウケる……」

前倒れになりながら笑う佐々木。もはや膝までついていく。

「もー、笑いすぎ！」

「だつて！ ・・・ だつてさあ～・・・ あははーー」

もうだめだと思つほどに佐々木は爆笑していた。

葉子は顔がどんどん赤くなるのがわかつた。冷えた手を当てるも
向に收まりそうもない。扇いでみても同じだった。佐々木はといづ
と田につつすらと涙まで浮かべている。

「いじ田舎者！」

声と共に表れた少年は手にある日本史の教科書で佐々木の頭部を殴
つた。

「いっ・・・山本おおお・・・

殴られた当人は唇をかみしめている。本当に痛そうだ。

「相羽さん、来てたんだ」

「う、うん」

彼の手元を見る限り、教科書の角で殴ったことは明白だ。佐々木に視線を戻すとまだうずくまっている。

大丈夫なのだろうか。なにせ相手は「日本史の教科書」だ。

「それ、チョコ? しかもトリュフ?」

佐々木など口に入つていなかのように言葉を続ける。さらに山本は葉子から袋を取り上げ勝手に中を開けた。そしてパクリ。遠慮という言葉を知らないのか、2つ目も口にした。

「で、なんで佐々木は馬鹿みたいに笑つてたの?」

「羽佐間に秘密なんてなさそーだつて言つたんだよ」

痛みが治まってきたのか、佐々木は立ち上がった。

「あー、確かにね。うん。秘密があつても顔でバレそう。それよりなんでチョコを貰つたかが気になる。あ、もう1個ちょうどい」
自由人、と佐々木と葉子は思つた。

「頑張れつてことで貰つたの」

「へー、学年首位限定ギフトつてわけか」

それをお前がむさぼつているけどなど、佐々木は心の中で呟いた。

その後、3人で貰つたチョコを食べあつた。

案の定、終業式の日に自習室を利用する者はいなかつたので、フリースペースと化していた。

佐々木は使用禁止の携帯をいじり、山本はチョコの香りに酔つたらしく、眉間にしわをよせている。

葉子はとすると、息苦さを感じていた。

若月の友人2人と同じ空間に入ることに戸惑っていた。早く勉強したいのだが、この状況を打破できずにいた。ただ「勉強するね」と言えばいいだけなのだが、それができない。チラチラと2人を見る

も特に反応がない。

(・・・よし!)

意を決して立ち上がりすると、山本にスカートを掴まれた。

「山本、そのまま上に上げる。そしたらお前を犯罪者として罰めるから」

「ちょっと!」

葉子は裾を引っ張るが、山本は放さない。むしろ見つめてくる。

「冬休み空いてる?」

「・・・え」

何を言い出すのだろうか、この男は。

「一日くらい、いいよね?」

「え・・・う、えーっと」

(山本、なに考えているんだ?)

佐々木は友人の行動が全く理解できなかつた。そしてこの状況をどのように打破すればよいのかで悩んでいた。友人は女子のスカートを掴み、デート(?)の申し込みまでしている。ここはとりあえず、からかつてみることにした。

「おいおい山本。なにデートに誘つてんだよ」

「駄目?」

効果は皆無だつた。だが佐々木は諦めない。次だ次。

「近い日がいいかな? 23日はどう?」

「な、なにするんだよ? 会つて」

「お前に聞いてない」

「・・・はい」

(もう帰ろつかな)

佐々木はおずおずと立ち上がり、強行手段に出すこととした。

「放してやれっての!..」

「む!」

言葉と同時に葉子の腕をひっぱる。反動で少女の身体が佐々木の胸に倒れこむ。

その瞬間、自習室のドアが開いた。

「・・・・・」

現れた少年は黙つて現状を見つめる。

女子のスカートを掴む友人1人。そしてその彼女を後ろから抱きしめている友人1人。

「よお・・・若・・月（タイミング考えるー・・・）」

少年 若月は眉をひそめた。

「おまえら、何してんだよ」

氷点下の声とどこまでも暗い瞳。普段見られない若月がそこにいた。

お、来た来た。遅いなー。

あんな顔、見たことねー。これ、殺されるかな・・・あはは

全く逆のことを思っていた山本と佐々木だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8200e/>

また会えたら

2011年2月10日02時09分発行